

巻頭言 「聖書を囲む礼拝」

宇野 元

ヘルマン・ヘッセは、父が宣教師、母は宣教師の娘であり、家族が住んでいたバーゼルの宣教師館には多くの牧師が出入りしていました。バーゼルは宗教改革の伝統をもつスイスの改革派教会の都市です。ヘッセの小説には、彼にとってなじみ深い、当時のプロテスタント、とりわけ改革派教会の牧師の姿が描かれています。初期の『車輪の下』に登場する牧師は、町の人たちから疑いの目でみられています。神学校の入学試験に合格した主人公の少年が、新訳聖書をギリシャ語で読む手ほどきを受けるため、牧師館に通い始めると、靴屋のおじさんがなんとも言うて警告します。——信仰を失わないようくれぐれも気をつけるんだぞ。牧師はおまえに聖書はまちがっている、と言うだろうからな。中期の傑作『デミアン』には、風変わりな元牧師のオルガン演奏家が登場します。夜、街を歩いていた主人公の青年は、人気のない教会からパイプオルガンが聞こえるのに足をとめ、おそろおそろ教会にはいります。交わりが生まれ、打ち解けた関係になると、元牧師がいいます。「ぼくたちの宗教は、まるで宗教でないように営まれている。」プロテスタント教会、そして改革派教会が、どのように見られることがあるかをよく示しているでしょう。ヘッセが上記の二作を書いてから100年になりますが、頭でっかち、という見方は、いまでもプロテスタント、そして改革派教会につきまといます。

飾りの少ない簡素な礼拝の空間。聖像や聖画は見当たらない。牧師は平凡な背広姿。聖職者らしくみえません。あるのはひらいた聖書のみ。礼拝もあまり儀式的な印象をあたえないでしょう。讃美歌を歌う。祈りを捧げる。信仰を告白する。そして聖書の宣べ伝えが中心にある。簡素な空間でなされる単純な礼拝は、あまり宗教的な感じがしない。陶酔感がない。むしろ非陶酔的である。それゆえ、感動を伴わず、感覚的なセンスが乏しいかのように見られることがあります。それだけに、プロテスタント、そして私たちは確かな自覚をもっていたいものです。説教壇にある聖書のみ。それだけに、御言葉の豊かさ深さを感じ、味わうよう招かれています。私たち人間の中から生まれるのちがう言葉が語られる。私たちが自ら手に入れることのできない、私たちに必要な知らせが語られる。私たちの拠り所が与えられる。それはどれほど感動的で、喜びと感謝を与えるものであるか。